

## 整形外科患者における摂食嚥下機能障害の調査

春風会 田上記念病院 リハビリテーション部

○山下紗季 持増健作 川上剛 小田博重 中村浩一郎

### 【目的】

整形外科患者は言語聴覚士(ST)の処方が対象外であり、嚥下障害を見逃されやすい。当院では疾患に関わらず医師の指示の元、STによる摂食嚥下機能評価を行っている。今回、当院に入院した整形外科患者における摂食嚥下障害の実態と ST 介入による影響を後向きに調査した。

### 【対象・方法】

2016年4月から2017年3月までに当院回復期リハ病棟に入院し、研究に同意が得られた整形外科患者20名(80.2±10.3歳)を対象とした。カルテより年齢、入院日数、Alb値、食形態、藤島式嚥下グレード(嚥下グレード)、機能的自立度評価表の食事得点(食事FIM)、転帰先を調査し、Alb値と嚥下グレード、食形態、食事FIM得点は入院時から退院時の変化値を抽出した。その中で嚥下グレード9点以下、且つ誤嚥やトロミ剤の使用から嚥下機能低下ありと判断されSTが介入した群を介入群(11名)、それ以外を非介入群(9名)とし、両群の比較検定を行った。なお、本研究は当院の倫理委員会の承認を得て実施した。

### 【結果】

年齢は介入群(87.8±4.10歳)が有意に高齢であった( $p<0.01$ )。入院日数、Alb値、食形態、転帰先は介入群と非介入群に有意差を認めなかった。嚥下グレード、食事FIM得点は入院時において介入群が有意に低下を認めたが( $p<0.05$ )、退院時は有意差を認めなかった。嚥下グレード、食事FIM得点の変化値は介入群が有意に改善を認めた( $p<0.01$ )。

### 【考察】

今回の研究より介入群は有意に高齢で、入院時食事FIM得点は低値であった。また介入群は嚥下グレード、食事FIM得点の変化値において有意に改善していた。Loveらは大腿骨近位部骨折術後の患者の約3割に摂食嚥下障害が見られたと報告している。整形外科患者においても摂食嚥下機能評価の必要性を確認でき、積極的なST介入が摂食嚥下機能の改善に繋がる可能性が示唆された。